

奨励

あなたに十分である

奨励	青山 謙二郎〔あおやま・けんじろう〕
奨励者紹介	同志社大学心理学部教授
研究テーマ	学習心理学、行動分析学、食行動の心理学

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

(コリントの信徒への手紙二 12章9-10節)

水くみ人と

二つの大きな水がめ

愛知県の金城学院大学の礼拝での説教がwebで公開されています。宣教師で文学部教授のテイボーン・サンフォードさんの話を、少し紹介させていただきます。

水汲み人と二つの大きな水がめの話です。インドに、水汲み人がいました。その水汲み人は二つの大きな水がめを持っていました。水汲み人は、さおの両端に、一つずつ水がめを下げて、それを肩に掛けて水を運んでいました。一つは傷がないきれいな水がめでした。ですので、川から主人の家までの長い距離を、きちんと水を運ぶことができました。もう一つの水がめにはヒビが入っていました。ですから、水がヒビから漏れてしまい、主人の家に着くころには水は半分しか残っていませんでした。この水汲み人は、毎日毎日、水を主人の家まで運び続けていたのです。

ある日のことです。きれいな水がめは自慢しました。毎日、自分の仕事をずっと完璧にしてきたからです。ヒビが入った水がめは、仕事がきちんとできなかったで、とても恥ずかしくなりました。いつも仕事の半分しかできてなかったのです。ある日、いつも水を汲む川のそばで、ヒビの入った水がめは、水汲み人に言いました。

「私はとても恥ずかしいです。本当にごめんなさい」。「どうしたんだい。何が恥ずかしいの？」と水汲み人は尋ねました。「私のヒビのためにずっと水を半分しか運ばませんでした。残りの半分は、ご主人様の家に帰る途中で漏れてしまいました。私のせいで、あなたは余分に仕事をしなければなりませんでした」。水汲み人は、ヒビの入った水がめに言いました。「川からご主人様の家に帰るとき、道端に美しい花が咲いているのを見てごらん」。

帰り道、ヒビが入った水がめは、道端に咲くたくさんの美しい花を見ました。水がめは少し元気になりました。でも、道の終わりに来ると再び気持ちが沈んできました。運んでいる水がずっと漏れていたからです。それで水汲み人に謝りました。

水汲み人は言いました。「あの美しい花は、きれいな水がめが通った方ではなくて、お前が通った方にだけ咲いているのに気がついたかい。実を言うと、お前のヒビのことを知っていて、それを役に立てようと考えたんだ。そしてお前が通る方に花の種をまいた。だからお前は、川から帰ってくる途中、毎日水やりをしていたんだよ。おかげで、私はご主人様のテーブルに美しい花を飾ることができた。お前がいなかったら、ご主人様が美しい花を家で楽しむことはできなかったんだよ」。

人は誰でも欠点をもっています。私たちもヒビの入った水がめなのです。でも、そのヒビのおかげで、神さまのテーブルを美しく飾ることができるのです。自分の欠点のことをあまり心配しないでください。それを認めることで、美しいものを作り出すこともできるのです。短所のなかにも長所があることを覚えていてください。

このようなお話をされました。とても良い説教です。

平良修牧師

次はテレビからの受け売りです。年末にNHKで放送された「こころの時代～宗教・人生～『イエスと歩む沖縄』」という番組を見ました。「こころの時代～宗教・人生～」という番組は、キリスト教だけでなく、いろいろな宗教の話が出てくるのですが、その回は、平（たいら）良修（おさむ）牧師の話でした。牧師生活57年の82歳。プロテスタントの日本基督教団の牧師です。平良牧師は沖縄の宮古島の出身です。

僕は沖縄が好きで、今まで3回観光に行っていますが、宮古島は行ったことがありません。宮古島よりもう少し沖縄本島から離れたところにある西表島には、大学3年生のときに友人たちと行きました。そのときは大変な目に遭いました。日帰りのつもりで西表島のジャングル縦断のハイキングに行ったのですが、道に迷って出られなくなって、ハブの脅威におびえながら一晩をジャングルのなかで過ごしました。その翌年、大学4年生のときの卒業旅行では、沖縄の波照間島に行きました。西表島の近くのきれいな島です。人が住んでいる島としては日本最南端の島だそうです。のんびりと楽しい旅行でした。一緒に旅行に行った友人から、戦争マリアの話を聞いたのはそのときでした。

戦争マリアの話を知っていますか。知らない人はぜひ一度調べてみてください。第二次世界大戦のころ、まだ沖縄にはマリアがあったのです。現地の人は、どこが危ないか知っていたので、マリアが蔓延しているところには行きませんでした。しかし、戦争が激しくなると、米軍の攻撃の危険があるということで、日本軍によって波照間島の人びとは全員が強制的に西表島に疎開させられました。しかし、そこは西表島のなかでもマリアがひどいところだったのです。波照間島の人たちもマリアのことを知っていたので疎開を嫌がったのですが、軍は住民の言うことに耳を貸しませんでした。疎開させられた人びとは次々とマリアにかかりました。資料によって多少値が違いますが、波照間島の全人口1590人の99%以上の人が罹患しました。マリアによる犠牲者数は、477人でした。この戦争マリアの悲劇は波照間島だけでなく沖縄全体で起こりました。波照間島や西表島などを含む地域を八重山と言います。八重山全体で空襲による死者は174名でした。八重山で、軍によって強制的に疎開させられて、マリアで亡くなった方は、3647名と言われているそうです。

話を平良牧師に戻します。平良牧師も沖縄戦前の1944年に台湾に疎開されました。そして敗戦の後、宮古島に戻られました。宮古高校の時代に国仲寛一牧師と出会われました。これが第一のイエスとの出会いでした。国仲牧師は具体的な行動を通して若者にイエスの道を伝えたそうです。礼拝後、トラックに若者を乗せ、ともに宮古島のハンセン病施設に行きました。当時の施設は島の片隅で、有刺鉄線で隔離されていました。患者は、たとえば、子どもを産むことを禁じられるといった差別を受けていました。国仲牧師は、小さい者、弱い者の傍らにいたイエスの教えを伝え励ましたそうです。若者にも、患者に積極的に会い、交遊することを進めたそうです。大学進学のため平良さんが島を離れることになり、国仲牧師にあいさつに行ったのですが、そのときが国仲牧師との最後の時となりました。国仲牧師は肺結核のため病床にあったのです。「平良君、教会の後を頼む」と言われたそうです。

沖縄での牧師生活の

始まりとアメリカ留学

平良さんは日本の「本土」に留学します。留学先が同志社大学ではなくて残念ですが、東京神学大学で牧師になるために勉強をされました。学費の多くは米軍の教会からの寄付により賄いました。7年後に沖縄に戻ります。コザ市（今の沖縄市）の上地（じょうち）教会に赴任します。この教会は嘉手納基地のゲート近くにありました。

米軍の教会に感謝しつつ始まった牧師生活でした。お礼に米軍の教会に行かれたそうです。米軍の教会でも歓迎されました。基地の中にも招待してくれました。当時の沖縄に比べれば、基地の中はきらびやかで御殿のようでした。クリスチャン同士という仲間意識から、一般の沖縄の人が入れないところに、入れてもらったのです。平良牧師はそのころのことを振り返り、米軍によって足を踏みつけられている一般の住民から離れて、足を踏みつける側の米軍に身をすり寄せていたと語っておられます。

6年後の1965年、平良牧師はアメリカのテネシー州にあるジョージ・ピーボディ教育大学に留学されます。沖縄に開学した沖縄キリスト教学院短期大学の次期学長に推挙されていたためです。留学生活のなかで、ある日、白人の友だちに誘われ教会で開かれた黒人集会に参加して衝撃を受けたそうです。当時は、人種差別撤廃をめざす公民権運動が激しく行われていました。平良牧師は、運動のさなかで犠牲になった仲間を偲び、黒人がゴスペルを歌う姿を見て衝撃を受けました。その歌声が沖縄を強く呼び起こしました。

「Nobody Knows the Trouble I've Seen」という歌が歌われていました。自分たちの悲しみは誰も知らない。知っているのはイエス様だけだ。イエス様、なんとかしてくれと訴える激しい歌でした。言葉にならないショックを受けたそうです。同じように激しい歌が沖縄でも歌われていた。それが自分には届いていなかった。知ってはいたけれど、自分の歌にはなっていないかった。これが第二のイエス・キリストとの出会いでした。

マタイによる福音書の25章34節から40節を平良牧師は引用されます。主が正しい人たちに「天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。」と言い、その理由を「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませてくれたからだ。」と説明する箇所です。正しい人たちは「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。」と尋ねます。それに対する答えは「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」というものでした。

つまり、苦しんでいる人にしたことは私、神様にしたこと。しないことは、私を突き放すこと。小さなキリストを大事にせずに、なんでキリストを大事にすると言えるのか。黒人霊歌を歌う人も、沖縄の民衆も小さなキリストなのだ、と語られます。

沖縄に戻られた後の活動

平良牧師は沖縄に戻られ、１９６６年、新しい高等弁務官の就任がありました。高等弁務官は、米軍統治下の沖縄での米国の最高権力者であり、強大な権力をもった帝王と恐れられていました。その就任式で平良牧師は祝福の祈りを捧げるよう依頼されました。そして祝福の祈りを捧げました。「最後の高等弁務官になりますように」と祈ったのです。米国による沖縄の支配が早く終わるようにということです。平良牧師は「神よ、沖縄にはイエス・キリストが命をかけて愛しておられる１００万の市民がおられます。高等弁務官をして、市民の人権の尊厳の前に深く頭を垂れさせてください」と祈られました。この祈りは沖縄の人びとに大きな共感を呼びました。しかし、アメリカの新聞などのマスコミは、牧師が政治と宗教の二股をかけたと批判的だったそうです。

平良牧師は、祈りの意図を、人が人を力で支配する世界ではなく、人間としての尊厳が大切にされる世界への訴えであつたと語られます。イエスが弟子たちの足を洗ったように、沖縄の人びとの足を洗うつもりで職権をはたして欲しいという祈りだったと。そして、沖縄が本来の正常な状態に回復しますようにと祈ったそうです。当時は、異常な米軍支配から解放されて平和憲法の日本に返ることが正常な姿だと信じていたそうです。その６年後、沖縄は日本に復帰しました。果たして米軍基地が集中する今の沖縄が正常な状態なのかと平良牧師は問いかけられます。そして、今も存続する基地に牧師の立場から反対されています。

平良牧師は、番組のなかで聖書を引用されます。マタイによる福音書の22章37節から40節です。何が一番大事な神の戒めか。第一に全力で神を愛しなさい。それから第二に隣人を自分のように愛しなさい。それ以外はない。そして、目に見えない神を愛するのは抽象的で、人を大事にすることを通して神を大事にするのだ、と語られました。

恵みは十分なのか

今日の僕の話は「恵みは十分なのか」という話です。恵みが十分であれば、現状でいいではないかという話につながります。平良牧師の場合であれば、沖縄の人びとも恵みは十分で、現状でいいではないかになってしまうのでしょうか。「小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」と矛盾してしまうように思います。

矛盾しているかどうかなんて、どうでもいいのだと思います。全ての人は恵みを十分に受けている、そして、恵みを受けていても、なお、小さい者を大事にしなければならないのです。

小さい者は大事にされるようになるのでしょうか。昨年、半年間、アメリカのワシントン州にあるウエスタン・ワシントン大学で在外研究する機会を与えられました。ワシントン州はアメリカの西海岸の北の端にあるリベラルな州です。家族で行って子どもたちはアメリカの公立の学校に行きました。そのときに、子どもの友だちの親から印象的な話を聞きました。今、ワシントン州の小さな子どもたちは、昔のアメリカでの黒人差別の話を聞くと、冗談だと思って笑うのだそうです。レストランもトイレもバスも別だった。黒人が白人専用のレストランに入ってはいけなかったという話を聞くと、そんな馬鹿なことがあるはずが無いと思って、冗談だと受け取るのだそうです。もちろん今でも差別はあります。子どもも差別があることをやがて否応なく実感するでしょう。しかし、一昔前には、小さな子どもでも、差別があるのが当たり前で、それを信じられずに冗談だと笑うという日がくるとはとても思えなかったのです。50年前に平良牧師がアメリカにおられたころの人びとの努力が、実を結びつつあるのです。

2014年1月8日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録